インド、グジャラート州カッチ、Ajrakh工房での天然ラックを使った染め

Dr Ismail and Sufiyan Khatri, Ajrakh工房

使用材料

地元産の天然ラック、ミロバランの粉、 タマリンド、明礬、自家製鉄媒染液

鉄媒染液の作り方

錆びた鉄と砂糖を水に入れて発酵 させ、タマリンドの種を加える。

当日染めた布

- ・タサール絹のストール(鉄媒染)
- ・家蚕絹のストール(アルミ媒染)
- グジャラート産ガジ絹の布(鉄)
- ・サーマ絹の布(アルミ)
- 家蚕絹の端切れ(アルミ)
- ・メリノ種ルディアの羊毛の布2枚 (アルミ・鉄それぞれ一枚)

Ismail Khatri博士の一族は染めを職とするラバリーのムスリム。元々カッチと同じ国に属していた、現在はパキスタンのシンドに住んでいたが、国が分裂したため、染色に適した良い水のある現在のカッチのDhamadkalに移住した。Ismail博士は9代目、長男のSufiyan氏は10代目。Ismail博士は若い頃、化学染料でアレルギーを起こしたことをきっかけに、1960年代に父から天然染料での染めと木版摺り染めの技術を学んだ。化学薬品を一切使わずに染色を行う工房に多くの人が訪問するようになったので、英語を学んで詳しい説明をするようになり、のちにイギリスのDe Montfort Universityで名誉学位を取得した。しかし、25年ほど前に工房の近くの川が干上がってしまったため、井戸を掘り水を確保したが、今度は2001年にBhij郊外を震源地とする大地震で、井戸水に鉄分が入るようになったため、現在の場所に移動した。現在はここに新たに掘った井戸の地下水を使っている。この工房では南インドから買うミロバランの粉以外は、ほぼ地元で入手できる材料のみを使って染めを行っている。ラック以外の素材は藍、ザクロの皮、ターメリック、インド茜、蘇芳、ギョリュウの花、ログウッド、ヘナ、ルバーブの根、助剤はケツメイシ(天然ハイドロ)、石灰、"Lanio"というラクダが好んで食べる植物を燃やした灰、アラビアガム、ラクダの糞、泥など。媒染剤は重クロム酸カリ、塩化銅、明礬、自家製鉄媒染液の4種類のみだが、前者2つは毒性が強いのでなるだけ使わない。ラックは地元で採れる天然のものを使うほか、アーメダバードで売っているブロック状の「ラック泥」と呼ばれるラック洗浄時の沈殿物と、最近はカナダの会社のラックダイも補助的に使っている。地元の天然ラックは現地でで"Pippli"と呼ばれる葉の広い木や、"Beri"と呼ばれるインドナツメの一種に寄生するKerria rangoonensisではないかと推測される。

染めの手順



1. 布は3-4日以上前にミロバランの 粉を溶かした水に一晩浸し、洗って 乾かしておく。



2. 酸度調整に使う生タマリンド1kg は前日に水に浸しておく。当日使う 場合はお湯に浸し、水を加える。



3. 水に500gの明礬を溶かし、半量 づつに分け、一方にのみ鉄媒染液 を適量混ぜておく。



4. 染める布を明礬水に30分程度浸したのち、広げて乾かす。鉄媒染するものも同様にする。



5. 鉄媒染の場合、薄黄色い布がブルーグレー調の色に変化する。



6. お湯を入れたバケツに天然ラック1キロを入れて柔らかくする。



7. 柔らかくなったラックを石などで 細かく砕く。



8. 15リットルの湯に砕いたラックを 加える。



9. そこにタマリンドを水ごと加えて 良く混ぜると、鮮やかな赤色になる。



10. 70リットルの湯を沸かしたアルミの大鍋こ入れ30分ほど加熱する。



11. 色を確認してから、まずは明礬 媒染した布を入れる。



12. ムラが出ないように布を広げ、 かき混ぜながら煮続ける。



13. 布を広げ色を確認し、良く染まっていたら取り出す。



14. 明礬のみの媒染の布を取り出した後に鉄媒染の布を入れ煮る。



15. きれいな流水で洗う。布についた樹脂分はお湯で洗い流す。



16. 地面に広げて乾かす。必要に応じこの後に木版摺り作業を行う。

ラックの色を良く出すために石灰水を加えることもあるが、木版摺りをする場合は明礬に影響を与えるため使えない。 今回は1年前の古いラックを使ったので濾さないが、新しいラックを使うと熱で溶けて布にくっついてしまう。